

青野豊一、2016. 32.26

縮小社会研究会総会資料①

著者：内田 樹

「帰りなんいざ 農を選ぶ人々を守ろう」,

日本農業新聞, 2014年6月2日

記入者:五十嵐 敏郎

記入日:2015年1月17日

- ・「地方回帰」として、家族とともに里山に移り住んだ人が見られる。
- ・1970年代の全共闘運動が壊滅した後も、敗残の若者たちが「自然に帰ろう」と唱えた。また、有機農業、ニューエイジ、マクロビオテックや瞑想が一時的なブームになった。絶頂期を迎えつつあった高度資本主義社会に対する若者たちの「異議申し立て」であり、頭で考えだした解で、「自然」がいささか希薄だった。
- ・現在の「帰農」の流れは1970年代とは異なる。1970年代は都会で賃労をするか、里山で農業をするか、どちらかを選ぶこともできた。今度の「帰農」は、「もう都会では暮らせない」という切迫感に駆られてのこと。
- ・都市部での雇用条件の劇的な劣化が、この趨勢を加速している。就職情報産業と財界と大学が進めてきた「グローバル人材育成」は「大量の互換可能な求職者を限定的な雇用先に集中させることによって、能力の高い労働者を低賃金で雇用する」仕掛けで、企業は人件費コストの削減を実現し大きな収益を上げたが、その反作用として「都市部で賃労働する以外の選択肢」を真剣に考える若者を生み出した。
- ・人口と資本と雇用を首都圏への一極集中と農業の企業化がグローバル化への最適解だと信じる政財官界は、この趨勢を喜ばない。
- ・地方での雇用創出と地産地消・自給自足を目指す帰農者たちの「小商い」的な経済活動に対し、政財官界は有形無形の圧力をかけるだろう。
- ・今こそ、金儲けのためではなく、より良く生きるために農業を選んだ人々をグローバルリストの干渉から守り、支援するかを真剣に考えるべきで

ある。

考えたこと 今度の帰農ブームは本物か？

- ・帰農という考えは昔から私たちの心の中にあっ
- た。
- ・しかし、明治期以降の第二次大戦までは、追いつけ追い越せで凝り固まり、第二次大戦後はやれ戦後復興だ、高度成長に乗り遅れるなどか、失われた20年期には、さらに馬車馬の程度を高めることで乗り切ろうとした。これらは、農村を疲弊させて、
- ・その反省もなしに、都会で食えない人たちが増えると、今度は地域活性化など唱えているが、本心は、いらなくなった人達を地域に戻したいだけ。そうではなく、能力の高い人、現役で働ける人達を農村に戻す運動でなければならぬ
- ・いずれ(私の予想の早いケースは2017年以降)石油文明の終焉が始まると、現在の石油漬けの大規模農業は成り立たない。そしてその余剰生産物を頼りにしている日本の食糧政策も破たんする。
- ・それでも人々は生き続けねばならない。今から、農業に知恵を注いで地域活性化を模索しよう*
一部改作

資料②農文協への手紙

今日1月13日は、雨。久しぶりの休日とした。忙しかった12月であった。そして、たたくわしくパタパタと過ぎていった年末・正月であった。私は、農作業の遅れを取りもどすため、元日から竹林の伐採した竹を燃やしていた。1月の2日も、3日も終日仕事をした。そのため、送られてきた雑誌「地域」(「現代農業」増刊号)を取り出すこともしなかった。いや、見たくなかったのだ。この雑誌から魅力を感じ取れないのだ。私の知人は言った。「あれは、くだらん。田舎を漫画化している。購読して欲しいと頼まれて始めたが、たいして役立たない。胸糞悪い。(購読を)止めたいなあ。」
こういった人は、田舎の田んぼで、5月に「アートの田んぼ*」という催しをしている。自費で、…。まさしく、年季の入った「バカ者」である。*ネット検索を!

この人は、今は小学校区の旧村の公民館長である。それまでは教員を退職した官僚体質そのもの人が館長をしていたが、これを改革しようと、行政の末端機関を使っているいろいろと工夫しているこの人にとって、雑誌『地域』は役立たないということだ。

田舎は変わらなくてはどうにもならない事態(衰退・縮小)となってきているのに、このことへの対応・対策へと動き出す最初の駆動力がなかなかつかない現実がある。この変化への駆動力をつけていくことに、雑誌「地域」は役立たない、と言っているのだ。

改革の駆動力をつけるには、「よそ者」が増えることは、一つのきっかけとなるであろう。ならば、その取り組み状況を詳しく、失敗事項も含めて書いて欲しいものである。漫画チックな記事では、どうにもならない。雑誌「地域」には、地域活性化の取り組みを教訓化されるようには書かれていない。如何なることも、そんなうまくいくものではない。人は、失敗を通して学ぶのである。そこで、この失敗事例に大きく関係するであろう一つのことについて意見を述べたい。

●「田舎の毒」について

この雑誌「地域」にはこのこととの関わり合い・苦闘が書かれていない、きちんと向き合っていない。地域の活性化を図ろうとしたとき、必ずぶつかるのが、この「毒」である。この毒のため、多くの人々が挫折してきた。プルードンは、「農民は過激な所有者である」と言った。過激な所有者は、頑固な保守主義者でもある。時代の変化に向き合うことをしないのだ。新しいことを始めると、それをつぶしにかかったり、まったく無視する。この抵抗・圧力に抗しない限り、いかなる取り組みもできない。要は、「バカ者」が、それなりの展望をもたないことには、どうにもならないのだ。

「地域」の編集部の人たちは、旧来の村落共同体が崩壊していると認識しているのかもしれない。しかし、それは、大きな過ちである。依然として、これは、機能している。でも、この村落共同体は、一見頑強であるが、田舎に生まれ育った私から見て、大した中身があるようにはとても思えない。それな

のに、今も持続されている。そして、改革しようとする精神を打ちのめす力は十分ある。

だから、言いたい。この「田舎の毒」との関わりが書かれていない文章には心が動かないのだ。この雑誌に書かれていることはマンガであり、都会人である編集者たちの遊びなのだ。田舎で暮らすとは、この毒と向き合い暮らしていくことなのに……。

プルードンは、言っている。このような田舎の人たちを連れて社会が進歩するのは、100年たっても難しいと。農民の子であったプルードンは、農村を、田舎を、限りなく賛美した。でも、農民たちへは嫌悪の気持ちを隠していない。露骨に書いている。

この「過激な所有者」たちとの格闘に視点を当てないと、前に進みださない。

* 田舎の毒については、私の『とんでもないことが-美しいことを夢見て醜いことをする-』図書新聞社発行を参照。このことは、詳しいことを記載しない。体験すれば、すぐ気付くことなのだから。

農村の活性化には、「よそ者」「若者」、そして「バカ者」の視点が大切であると私は考えるが、農文協は、都会からの移住者を通して農村が喚起することを重視しているのであろう。「都市・農村共生社会創造全国リレーシンポジウム in 広島-地域をあきらめない-(1/13)」で基調講演をした島根県中山間地域研究センター研究統括監の藤山浩氏の説く「田園回帰 1%戦略」とよく似ている発送をしていると思える。

「よそ者」……都会からの移住者のこと。行政としては喜んで受け入れていても、肝心のもともとの住民たちは、自分たちとは異なる異邦人として、相手にしていない。

「若者」……でも、現代の男は委縮してしまい、頼りにならない。若い女性たちの頑張りばかりが目立つ、このごろである。この広島集会でも発表した4人は、女性ばかりである。

★さて、私からすると、最も大切なことは、田舎には「バカ者」がいることである。

この三者が手を組めば、何かができることは、間違いない。でも、こうなるのは、数少ない。「よそ者」の独身男は、3年もないうちに、いなくなる。「よそ者」の若い女性たちのすることは、住民にとって、理解しがたいこと、移住者たちだけで小さな集団を作っている。そして、「バカ者」など、今まで相手にされていなかった。だから、なかなか次の展望が見いだせない、改革への駆動力がつかない。

それなのに、この雑誌は、出来事をつまみ食いしてさもうまくいったように書かれている。広島での発表でも、良い事ばかり、田舎の生活環境を賛美する移住者たちの言葉が飛び交う。発表者は都会と田舎を複眼的視点、視差・差異を含んだ視線で見ての言葉であろうが、あのように賛美されると、もう聞きたくない。そこで、たまらなくなり、休憩時間に彼女らの前に行き、問題点を指摘すると、現実の問題をちらりと語りだした。

まあ、この会は、背広にネクタイの人たちが多かった。私の隣にいた人など、講演などどうでもよく、スマホで今夜の豪遊先を検索していたようだ。そして、さっさとなくなった。あの話は、役場職員向けの話であったようだ。行政としてこの視点で取り組みをしてみてもどうでしょうかと、言っていたように思えた。まあ、行政が取り組みを始めると、ころりと態度を迎えるのが、田舎の人たちである。行政に対して文句を言いつつも、それには従う。でも、自分からはなかなか動かないので、その活動がいつの間にか、どんどんずれていく。

だから、田舎の活性化のためには、「バカ者」たちが元気になれる視線で記事を書かなくてはならない。この人たちこそが、今後の田舎の在り方を左右しているのだ。移住者たちを受け入れ、そして定住へと手助けをしていく人たちなのだから、…。

* 実際の手紙を改作

総会資料③ 贈与と返礼の関係

先に「あれは、くだらん。田舎を漫画化している。」と言った人は、無農薬・無肥料の米作りをしながら、米の乾燥ともみすり(コメの実の殻の取り除き)をも一つの仕事としている。稲刈りした殻のついた米(もみ)を農家の人が持ってきて乾燥機に入れて、

その後「もみすり」をして玄米を取り出す機械をたくさん設置している。近隣の多くの農家がここで米の袋詰めしている。そのため、8月下旬より11月中旬まで、休日なしで稼働している。

この人は、今まで15年以上、田植え前の5月の下旬、山間の谷にある自分の田で「アートでたんぼ」という取り組みをしている。現代アートの展示と、各他のアマチュアバンドが演奏したり、昔ながらの手植えの田植えをしたり、太鼓を叩いて踊ったり、さらに演奏者たちとの交流をしている。

この取り組みを長年しているので、地域の人たちの中に協力者もいて、都市生活の若者たちも音楽鑑賞に来ている。この人に感化された若者たちもいる。

このおっさんは、地域の他の諸活動にも積極的に関わってきた。PTA 活動や、公民館活動にも、田舎で苦悩している人たちへの手助けにも、積極的に関わってきた。そして、今は、公民館の館長になっている。つまり、一定の人たちから支持されているのだ。「バカ者」も、物事を徹底して長年行うと支持されるようになる。

もちろん、このことを、良く思っていない人たちもいる。公務員や教員の退職者、没落を免れた旧家の人たち、そして広い田で野菜を作って年収の多い人たち等…。このような人たちは、この地に暮らしている眼前の人たちのことや、地域の現状についての危機意識などない。人のことなど見向きもしない。田舎の毒を吐きながら、…。そして、移り住んできた数少ない人たちを無視する。

このおっさんは、働いて得た金銭で豪華な家を建てたりしない。自分の諸活動に投入する。精神生活を豊かにすることに、芸術活動を通した人間関係を大切にしている。それで、このような日々の諸活動に対して、このことを支持している地域の人から、野菜、餅等が次々と届けられている。これは、彼のしている諸活動によって何ものかが贈与されていると思っている人たちからの返礼なのだ。

でも、彼の妻は、このような関係性が分からない。嫌で仕方がない。彼女から見て、変な人たちが集まってきているとの認識である。私も、その変な人たちの一人であるが、…。